

子どもと夏と皮膚の病気

院長

今年の夏は、どうも猛暑になりそうです。夏の暑さは楽しみである反面、子どもにとって大敵です。先月号の熱中症に続き、今月は夏に問題となる子どもの皮膚病について考えてみましょう。

暑さで一番目に付くようになるのが、「あせも」(汗疹)です。「あせも」と汗によるかぶれを混同しているお母さんは、以外と多いものです。「あせも」は乳幼児と老人に多くみられる、暑さが関係する皮膚病です。原因は汗をかくことによってかぶれるのではなく、汗を外に出す管(汗管)が詰ることによって皮膚の中に汗が溜まるのが原因です。赤ちゃんや老人に多くみられることから、汗せんの機能も関係しているとも考えられています。汗を多くかく環境、特に高温と多湿が関係し、特殊な状況では高熱や高温環境下での作業がきっかけとなることもあります。皮膚の表層に汗が溜まるものが水晶様汗疹と呼ばれ、1~3mmの水疱が汗をかきやすい部分(頭、顔、胸、背中など)に多発しますが、この状態では症状はありません。皮膚の中層に汗が溜まるものが紅色汗疹と呼ばれ、赤い色となり軽い痛みや痒みを伴う様になります。もっと深いところに汗が溜まったものは、深在性汗疹と呼ばれています。水晶様汗疹も溜まった汗の刺激や汚れなどによって、次第に赤みや痒みが増してくることがあります。原因の説明でもわかるように、大量の汗をかくことと汗管の詰りが原因ですから、「原因療法はなく予防が大切です。「あせも」にあまり神経質になり過ぎるお母さんに、時々「そんなに心配なら那須か軽井沢に行って避暑地で過しなさい」と意地悪を言うことがあります。皮膚の中に溜まった汗を消す方法が無い以上、予防することが重要で、基本は高温の環境を避けることです。クーラーなどを上手に使い、暑い時間帯は外にでないこと、汗をかいたら早めにふき取ること、暑い日はシャワーや水浴びをして身体の火照りをとることも効果的です。暑い時期には「あせも」は当たり前と考え、本人が困っていなければ治療の必要は無いと割り切ることが必要かもしれません。あせもが悪化して痒みが強くなり掻き傷が出るようであればステロイド軟膏やローションによる治療が必要になります。

「とびひ」も夏に多くみられる心配な皮膚病のひとつで、医学的には伝染性膿痂疹と呼ばれています。「あせも」、虫刺されや湿疹を掻きすぎたり、怪我した場所に、皮膚の常在菌であるブドウ球菌や連鎖球菌が感染すること

が原因です。高温多湿は細菌の成育に好都合なので、夏に多くみられることとなります。病変部位を掻くことによって、まるで火事の飛び火のように次々と広がることから、「とびひ」と呼ばれるようになりました。水疱から始まる「とびひ」は水疱性膿痂疹と呼ば



れています。水疱は次第に大きくなるとともに、あちこちに広がっていきます。数は少ないのですが、厚いかさぶたができる痂皮性膿痂疹は溶連菌が原因になります。局所療法も行われますが、子どもでは治る前に掻き広げるため抗生物質の服用が基本です。もちろん溶連菌が原因の場合は抗生物質による合併症予防のために長期の治療が必要となります。他人への感染や悪化させることがあるので、プールなどは避けるようにしましょう。入浴や石鹸で洗うことは清潔を保つために、むしろ必要と考えられています。

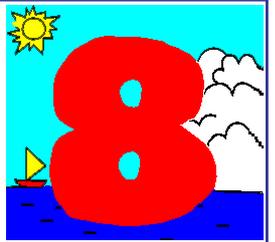
虫刺されも夏に多くみられます。虫の毒が身体に入り、免疫の反応により赤く腫れたり痒みが出てきます。腫れの程度は、虫の毒の種類や体質(免疫反応の強さ)が関係しています。強く腫れることを心配しますが、強い免疫を持っていると気楽に考えるしかありません。虫刺されで受診することがありますが、毒を消す方法が無いので病院だからといって特別な治療法はありません。治療の基本は痒みに対して抗ヒスタミン剤の軟膏を使用しますが、基本的には市販の軟膏と同じです。虫刺されは、「とびひ」の原因にもなるため、早めに痒み止めの軟膏やパッチを使うことが必要です。また強く腫れる体質のお子さんは、草むらに出掛けないことや虫よけスプレーも考慮したいものです。

ストロフルスという言葉聞いたことがありますか。子どもに特有は虫刺されが原因で起こる皮膚の過敏な反応と考えられ、乳幼児に多くみられ小学校に入る頃にはみられなくなります。虫に刺された後が赤くふくらみ、水疱に変わり、やがて硬いしこりになります。後期にわたって持続し、強いかゆみの特徴です。アレルギーを持っている子どもに多くみられると言われています。痒みが強いために、ステロイド軟膏による治療が必要です。

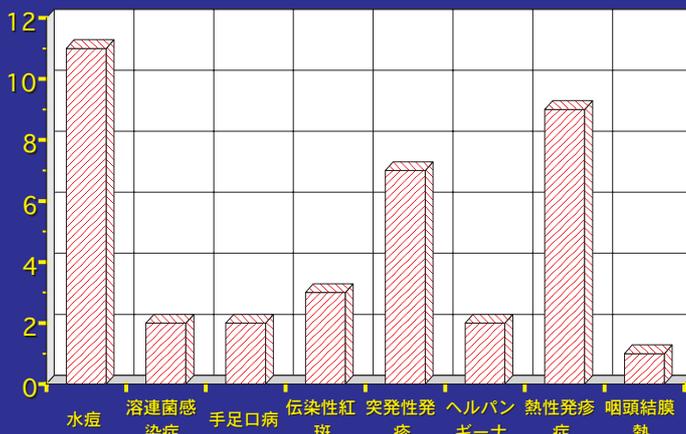
夏には特有な皮膚の病気があります。病気を理解することとともに、環境に気を遣いながら予防することを考えましょう。

読者の広場

先月は20通のメールを頂きました。ほとんど医療相談のメールなので、紹介しにくい所ですが、皆さんに役立つことを考えて、匿名ですが紹介します。まずは青葉区のAさんからです。「8月に飛行機に乗ることになったのですが、友人やネットでいったのですが、飛行機内で寝かせるために風邪薬や抗アレルギー剤を飲ませることがあるが…。できれば飛行機内では寝たほうがお互いのためにいいのでは・・・、と思います。で、お願いしますと処方はしていただけますでしょうか？ちなみに〇〇は卵白アレルギーです。」。さて皆さんはどう考えるでしょうか？。次のように返事をしました。「メールありがとう。当院では寝せるためにカゼ薬などを使うことはしていません。理由は病気でも無いのに、薬を与えることの問題。もう一つは効果が不確実なこと。カゼ薬を飲んでも、眠くなる子どももいれば眠くならない子もいます。普通の投与量では、眠くならないお子さんがほとんどです。確かに薬効には中枢神経系の抑制があり、眠気を引き起こすことは確かです。逆にこの眠気が、治療上の副作用(かぜ薬を飲んだ時には運転を避ける)として問題になります。最近の抗アレルギー剤は眠気が出ないという特徴さえあります。両方のことを考えれば、薬の投与の意味は無いと思います。効果があるか無いかわからない薬を健康な子どもに投与するより、自然が一番だと思いますが。」。そうしたらこんな返事が来ました。「ご返信ありがとうございます。私自身健康な子に薬？大丈夫？?とっていて、抵抗があったので質問させていただきました。自然に寝てくれるのが一番よいと思っています。」。やっぱりそう思いますよね。確かに飛行機の中で泣かれれば、周囲の迷惑を考えますが、お互い思いやりを持って、「旅は道連れ世は情け」という言葉もあるので。もうひとつ横浜に転居したEさんからメールです。「〇〇です。息子、XX(2才8ヶ月)が生まれたときからお世話になりました。アトピー等でいろいろとご指導を受け、感謝しきれないくらいです。6月末、転勤で仙台を離れ、川村先生に病院名無しの紹介状を書いていただきました。現在、横浜市港北区におります。私なりに病院探しをしていますが、なかなか情報が少なく、てこずっております。紹介は医療行為にあたること、覚悟のうえですが、先生のお知り合いの小児科専門医を教えてくださいましたらと思いい、メールをさせて頂いた次第です。宜しく願いいたします。」。たしかに転居した後の病院探しは大変かも知れません。何人かの小児科のDrを紹介したら、次のような返事を頂きました。「川村先生へ 〇〇です。お忙しいところお返事どうも有り難うございました。XXはおかげさまで健康に過ごしております。肌の状態を申し上げますと脚・腕にツツツ、全身にかゆみがかたい強くなりました。(略)実は、23日に近くの△△小児科心とからだのクリニックへ行ってきました。アレルギー科も掲げてあったので、しばらく通ってみようかなと考えてます。(略)転勤をはじめて経験して、かわむらこどもクリニックでお母さん指導をして頂いてよかったなと感じております。先生の一言で背中をポンと叩いて頂いた事もありました。新しい先生との信頼関係はこれからですが、◇◇小児クリニックも通える範囲内なので何かのときに行ってみようかと思っております。それでは、暑さ厳しき折、お体ご自愛下さいますようお祈り申し上げます。」。いつも書きますが、転居してもかわむらこどもクリニックの患者さんです。相談事でも何でも、御遠慮なく。



7月の感染症の集計



夏期休暇及び学会による休診のお知らせ

・夏期休暇 (お盆休み)

8月13日(月)～15日(水)

・日本外来小児科学会参加 (熊本)

8月23日(木)～25日(土)

御迷惑をお掛けしますが、よろしく、御理解とご協力をお願いします。

水痘は前月と同数で多くみられています。溶連菌感染症は一時とくらべれば、かなり減少しています。宮城県は全国的に見ても伝染性紅斑(7.31に仙台放送のムービンで解説)が多いのですが当院ではさほど多くはありません。夏にみられる、手足口病・ヘルパンギーナ・咽頭結膜熱(プール熱)もみられますが多くはありません。

8月のお知らせ

・東北大学医学部学生実習

8月10日(金)

よろしくをお願いします。

・栄養育児相談

毎週水曜日 13:30～

栄養士担当 無料



編集後記

言い訳ですが、先月は会合が多かったこと、テレビ取材(2回目は8.3ムービンの熱中症)、そして8.8の教育委員会の講演準備で、発行が遅れてしまいました。今月は2回に分けて夏の休暇を頂きますが、リフレッシュしてきますので、よろしく願い致します。



K's clinic

院長著書「小児科医がやさしく教える 赤ちゃん子どもの病気」の再版にご協力を。
詳しくは かわむらこどもクリニックHP(<http://www.kodomo-clinic.or.jp>)を